

フリーズ

今回の言葉物語は「フリーズ」です。

この機能が搭載されているのは、機能を理解しやすいM1・F1層（20〜34歳）とM2・F2層（35〜49歳）のはじめ辺りまでを対象としたスロット機を中心に多く、パチンコ機にも搭載している機種があります。定義としては「遊技を強制的に中断し展開されるチャンス演出」です。M1・F1層を中心と申し上げたのは、遊技が強制的に中断される演出は、その演出が分からない層には遊技台が故障したと勘違いされる事も多いためでしょう。

始まりは苦い過去から

日本でこの言葉を語る際に避けては

通れない過去として、

1992年のルイジアナ州における留学生殺人事件があります。これはハロウィンで訪れる予定の家庭を間違えてしまい、間違えられた住人が留学生を侵入者と判断して射殺してしま

った痛ましい事件で、ご存知の方も多いかと思いますが、その際に住人

がこの留学生に放った警告の言葉こそ「Freeze（動くな）」です。

この事件は米国そして日本で多大な影響を与え、銃社会とそうでない国との文化意識が大きく違うことを改めて痛切に思い知らされた事件でもありました。ともあれ、日本におけるフリーズという言葉は、文化の隔たりが生み出した悲しい事件からスタートしています。

さて、話題を本線に戻したいと思えます。フリーズ演出を最初に登場させたのは1999年に岡崎産業から登場した「キングジャック」と言われています。



当選時に2秒間フリーズの演出を搭載した「キングジャック」

もともと告知機能では1993年に登場した「ジャックポットII」以降高い評価を得ていた同社で、更なる告知の奥深さを探求した結果なのでしょうか。

告知機能に操作を受け付けない「違和感」という画期的な機能が、その後のパチスロをはじめ現代の遊技機に不可欠な機能となりました。一旦5号機登場当初は規制により禁止されましたが、解釈基準の変更に伴い再度目の目を見ることがなりました。ちなみに、この

キングジャックで初登場したフリーズ機能は後継機「クイーンジャック」にもしっかりと継承されており、フリーズ時間ごとに対応小役やボーナス確定などに対応している50種類のフリーズが搭載されています。もちろんフリーズ搭載数としては歴代最大です。設置店舗数は全国7店舗しかありませんので、ぜひ一度打ってみてはいかがでしょうか（P World機種インデックス検索6月14日現在）。

3万2768分の1の確立

パチスロ機の最大の醍醐味は「自分の手で抽選すること」にあります。確かに4号機のような出玉上でのプレミア感ほどでは無いにしろ、自分がその瞬間確かにこの腕で引き当てたという達成感、その日例え出なかつたとしてもある種の納得感さえ与えてくれます。写真の番長2におけるフリーズ演出は何と1/3万2768という確



大人気の「押忍!!番長2」のフリーズ演出。演出中リールは逆回転。

率の低さの割に出玉は500枚：という事も十分に起き得るものですが、その引き当てた瞬間の達成感たるや1週間友人との話のタネになるでしょう。フリーズという機能は、昨今の機種の中で遊技機の性能を引き出すプレミアム役としての役割を保持しつつも、その達成感を味わえ噛みしめることのできるような演出の妙も求められつつあるような気がします。そしてその仮説は昨今の人気機種にあるように、ただリールが止まるだけではなくリールを敢えて動かす、果てはその動かし方まで変化させる、音により周囲に響かせることで注目させるなど、その幅も広がりがつあります。ただそこにあるのは出玉の話ではなく、スロットやパチンコであれば出玉云々の次元の先にある最も狭い門をクリアした「ヒーロー」の証であり、そのヒーローへのささやかな褒美の演出ではないでしょうか。

（大和田敏男）

すごい達成感、演出の妙